

一ノ又ノ...

淡島御宇ノ末無燈版ノ...

四條流庖丁書  
俎之事并名所

朝拜身ノ入ノ四徳

|    |    |    |
|----|----|----|
| 宴醉 | 式古 | 五行 |
|----|----|----|

卷三十四

同尺之事 金子定

長二尺七寸五分

廣一尺六寸五分

厚三寸

足高二寸五分

足廣四寸

足厚二寸七分

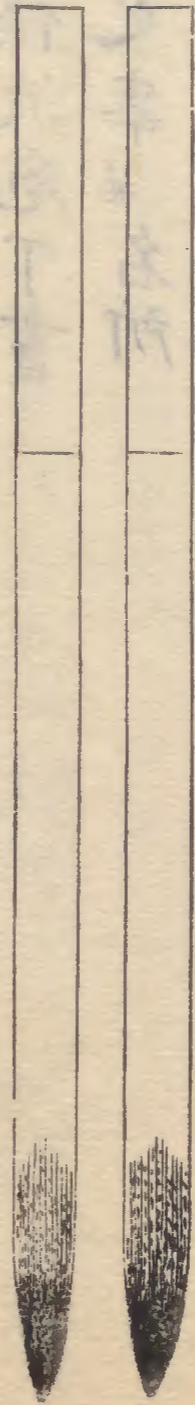
足付所切口ヨリ四寸

平七分口傳在之

木ハ檜ヲ可用

筋之事

陣代長一尺 金子定

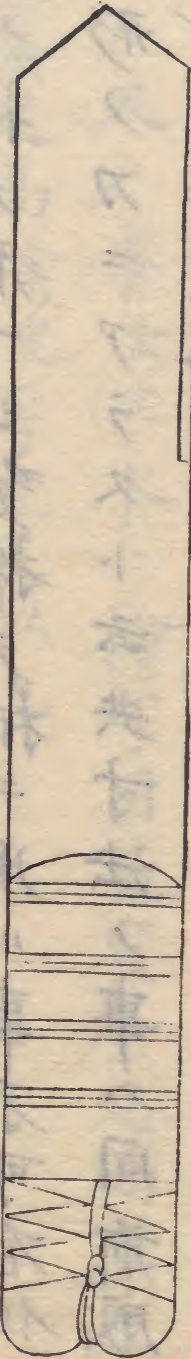


先キ一寸ヲコカスヘシ平形有ヘク候口傳ア  
リ先一寸ヲコカスヘキ様口傳ニ可有候木ハ  
ウツキ又ハコメクヲ可用也楯口傳在之  
刀之事

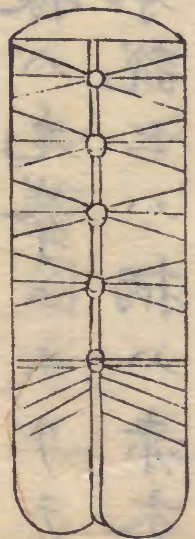
長サ目貫穴ヨリ九寸マナヨリ目貫穴ノ間一寸然ハ身  
ハ八寸ト可心得ナリ

角峯

丸峯



面



但劔形ノ刀也峯ノスリ様ハ丸峯ニスリテサ  
 キニ角可有候口傳ニ有本説ニハ柄ハ赤木又  
 ハ朴ヲ用ヘシ努擡ヲ柄ニ用ル事不可有但劔  
 形ノ刀ニアラスト云共寸法ノ事ハ同前成ヘ  
 シ口傳在之

一俎之事八足ト云モノ也今モ神前ニ有之其後四足  
 ヲ人間ノ人俎ト号メ用之同名所ノ夏俎ノ面ニ  
 アリ宴醉朝拜四徳五行式是也厨ヲ守ル六星此  
 俎ノ上ニ五ノ名所ニ下リテ守護セリ今一ノ名  
 所ヲ口傳トメ是ヲ當流ニ秘スル也仍名所ニ隨

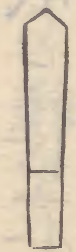
ヒテ切物ヲ可置上下事在之

|   |   |
|---|---|
| 拜 | 徳 |
| 式 |   |
| 醉 | 行 |

一俎ノ尺ノ事金定木ハ檜可用長廣厚足高廣平又  
 長廣足高金定号在之以上  
 一鯉ノ尺大小之事大中小目ヨリ下ヲ寸ノ定ト云々  
 一鯉ノヒレノ名共ヲコ、ニ注ス也繪圖有之

一筋ノ形コ、ニアリ此ガシギガタノ度口傳有ヒ  
シ形トハ當世人ノ申付タル也然間ヒシ形トハ  
不可言ガシギ形ト云ヘシ古ハガシキノ如ニ到  
タル也又綱ノ目ノ如クホリタル也口傳在之筋  
サキコガスハ鶉ノフヲマナヒタル間如毛成ヘ  
シ數ハ不定スチノ數ハ半成ヘシ同長一尺金定サ  
キ一寸ヲコカスヘシ手形ノ度長四寸金定ガシギ形  
可有今ノヒシ形ト云是也片面ニ十八宛兩方合廿六  
ナルベシ但片面ニ九宛モホル有是モ合四九廿六ト  
可心得也木ハサウツキ又ハコメクヲ本トスヘシ口傳

一庖丁カノ事長目釘穴ヨリ九寸マテヨリ目釘穴  
ノ間ハ一寸然ハ身ハ八寸ト可心得也劔形ノ刀  
也峯ノスリ様ハ九峯ニスリテサキ四寸ニ角ア  
ルヘシ口傳柄ハ赤木亦ハ朴ヲ可用努々檜ヲ可  
可用根本ハ鎚藤ヲ卷儀アリ今ノ庖丁ヲハトリ  
皮ニテ卷ナリ然ハアイ皮成ヘシ其上ヲ紙ニテ  
包度有ヘシ如此柄ハ鯉口也少ホリ入テ柄ノ木  
ハ兩方ホルヘシ此義少モ違ナラハ當流ニテハ  
不可在之ト云シ庖丁カノ崎ヲ折度劔形ヲ學可  
成口傳在之



如此編藤ヲ巻トイヘトモ口傳ニ在

替所有ヘシ繪圖ニ用捨有之刀ノ升

キ四寸ニ角ヲスル度泉ノ鯉ニ付テ

モ口傳有之可秘々々

一 庵丁ノ柄ヲ可巻度<sup>藍</sup>尺井草ニテ左巻可成巻數ハ  
十余リニシ切面ヨリ巻始テ手ノ内ニテ止ヘシ  
上下六ノ間へ巻留ル皮先ヲ引可出口傳ニ有之  
又皮ノ上ヲ紙ニテ巻度在是切物ニ隨テノ度成  
ヘシ可包紙ハ杉原成ヘシ其用過ハ包タル紙ヲ  
ホトキトル也當世ハ此事ナシ可秘之

一 ヤキ串ノ度大ヤキクシト云時ハ長一尺二寸小  
ヤキ串ト云時ハ一尺可成大焼串ノ時ハ節ヨリ  
上七寸節ヨリ下五寸合一尺二寸ト可心得也小  
ヤキクシノ時ハ節ヨリ上六寸節ヨリ下四寸合  
一尺ト可心得也何モ節ヨリ上ヲハ竹ノコウヨ  
クケツリ節ヨリ下ヲハコウヲ殘也竹ノ腹ノ方  
ヲシノキニ可立尚口傳有之

一 美物上下之事上ハ海ノ物中ハ河ノ物下ハ山ノ  
物但定リテ雜定事也河ノ物ヲ中ニ致タレ<sup>レ</sup>鯉  
ニ上ヲスル魚ナシ乍去鯨ハ鯉ヨリモ先ニ出メ

モ不苦其外ハ鯉ヲ上テ可置也鮒又ハ升コ以下  
ノ河魚ニハ海ノ物下ラスヘカラス乍去鯨ナト  
ハ亀足<sup>キツク</sup>在時ハ少ハ其心得有之ヘシ山ノ物下ト  
ハ定タレ厄鷹ノ鳥ニハ如何ナル白鳥成モ上ヲ  
スヘカラス雉ノ鳥ニ必可限何ニテモ鷹ノ取タ  
ル鳥ヲハ賞翫勝タルヘシ鷹ノ鳥ヲ人ニ参ラス  
ル時ニハ燒物ヨリ外ニスヘカラス余ノ御着ニ  
組付ル事スヘカラス一種タチニテ可参鷹ノ鳥  
ニテハ非トモ白鳥ノ夏一種タチニテ可参鯨モ  
司前也如何ナレハ似相タル物マレ成故組付ニ

ハスヘカラスト云々  
一スシノ事鮒ヲ本トスヘシ但何ノ鮒成モノ  
下ラスルヲ不可有之  
一ウルカナツシ物之事是亦サカルヘシ乍去コノ  
ワタ鮎ノウルカハラハゴハ若其時ノ始物ナラ  
ハ少ハ上ルヘシ雖如此也ト物ニヨリ色ニヨリ  
盛物ノ大小ニヨリテ組双ル次第定テ難定也  
是ヲ口傳トスヘシ  
一サシ味之事鯉ハワサヒス<sup>酢</sup>鯛ハ生姜ス鱸ナラハ  
蓴<sup>寶子</sup>スフカハミカラシノスエイモミカラシノス王餘魚

ハヌタス

一イト膾ト云ハ鮓膾ノ更也山吹膾ト云ハ王餘魚  
ナマス也マナカツホハ蓼スニテ可参ラス惣メ

蓼出来ヌレハナニ魚ニテモ蓼ス良也

一箸ノ事白ハシハ銀ヲ學赤ハシハ銅ヲ學也銀ハ

毒ヲ消故ニ學之也赤カ子ハ藥ヲ生也依之學也

一カイシキノ更檜葉 南天燭ハナツテソク是ナルヘシ青

皆鋪ト云ハ取分ヒハノ更也青カイテヲ飼鋪ニ

スル一以ノ外可凶イムトミヘタリ假初ニモ物ノ裏

ヲ面ニシテ飼敷ニ不可為吉事ニハ葉ノ面ヲ上

ニ成メ敷ヘシ不言ノ時ハ葉ノ裏ヲ上ニスヘシ

ナラサカヤコノテ柏ノ二面トニモ角ニモ子ヂケ人哉

此歌ニテモ見エタルヘシ

一ヒロ拾イ魚ノ事何魚ニテモ道ニテ拾タラシハ殊

外吉事可成但用之ヘキ様ニヨリテ吉ニ成凶ニ

成ト也當流ノ秘事不可有外聞者也仍頭有テ尾

ナキ魚ヲハ則頭ヲ切頭ナク尾斗有魚ヲハ則尾

ヲ切也若膳ニスヘタル丸煮ノ魚ニテモ自然ニ

頭ノ落尾ノ折事有ヘシ則箸ニテ一方ヲ押折也

大事ナクメ為吉事此扱コソ俎ノ上ノ口傳トメ

秘夏第一也扱如此拾タル魚ヲ持テ可參ラズ凡  
又人ニ喰セラルヘキモ可為計也同ハ至參リ  
タランコソ目出度カルヘケレ

一江列ノ鮓ヲ献立ニ丸莫ニト書タラハ魚ノ尾サキ  
ヲモオスヘカラス少モ刀寄タラハ丸ニトハ不  
可云

一女ニ參ラズル物ヲハ大ニ切ヘシ男ニ參ラズル  
ヲハ小ニキルヘシ口傳

一鳥ノ焼物ノ事女ニハヒツタレヲ上ニ盛ヘシ男  
ニハ別足別ヲトニ盛ベシ引引ハ陽別足ハ陰也然

ニ陰ニハ陽ノミヲ參也陽ニハ陰ノミヲ參スル  
也口傳有之和合ノ心也

一タコキリモルヘキ事タコヲハ前ヘ置テ可出扱  
飯ノ御回多ナラハ如何テモ薄ク丸ク可切御着ニ  
ハ少厚ク長ク切ヘシ何ニモイボラスキ皮ヲム  
キテ可切也

一エイノ事皮ヲムキテ作ヘシ努ニ皮ナカラ參ス  
ル不可有為人ニハ藥ニ非ト云々惣而エイヲ  
人ノ參コトサノミ久敷事ニ非昔ハ人恐テ不喰  
也其後ヨリ賞觀アリト申傳ヘタリ然間エイヲ



ヲハ白水ニ作り入テ毒ヲトルヘシ叔取上テ能  
シホリ拵テ可参如此旨ニ拵候喰ヌレハ腹中ヲ  
調无上ナル薬ト申傳タリ

一 鯨ノ事是モ皮ヲムクヘシ皮ナカラハ不可参子  
細也

一 蒲鋒ノ支刀メヲ付テ参スルハ悉ニハ不可有  
之貴人御前一兩人斗カト見エタリ當世真ヲ依  
テ不知推量テ萬仕間刀メヲ悉付テ出也然間是ヲ  
喰人過ヲ仕出事アリ古ヨリ刀メヲ不付ハ人ニ  
アヤマリヲ蒙ゼシガ為也貴人又ハ女房兒喝食

ナト斗ニハ刀メ有ヘシ刀メ付ルハ口傳人ニ見  
セサル様ニ可付當流ノ秘事也

一 龜足ノ事蒲鋒ニテモヌカコサシニテモ組付ノ上  
下ニヨリテ龜足ノ卷様替ヘシク様ノ事世ニ知  
人稀成ヘシ口傳龜足ノカタチノ事ハ蚌蒲鋒ハ  
同前ヌカコサシ以下ノ物ナトハ同前ナルヘシ  
鳥ノ別足包時ハ又替ヘシ  
一 鳥ノ別足ト云事別ナル足トハ如何ナル事ソマ  
朱雀院ノ御時トカヤ足ノ四有鳥アリ其御代天  
下太平ニメ目出カリシ也ソレヨリコソハ別足

トハ申傳キ今モ雲雀ニテモ鶉ニテモ足ヲ立テ  
 盛時賞翫ノ人ナレハ足ニ立ヘシ其外ハ足一立  
 テモ不苦 天子或京鎌倉ノ將軍ナトヘハ足ヲ  
 四立ルコト自然ニ有之是モ別足ノ心ニテ天下  
 ヲ祝タル心也然ニ無左右四立ル事不可有ト云  
 雲雀ノ足ヲ後凡長ヲ一殘メ殘ノ凡三ヲハ切捨  
 ヘシ鶉ヲハ足ヲモ凡ヲモ其終置ヘシ雲雀ヲハ  
 凡一殘シ鶉ヲハ足ヲ其終置事口傳コトナル事  
 ニテ有ヲ道ヲ不知者共小鳥ナラハ足ヲ可立事  
 トヤ推量仕テ鶉其外小鳥ノ足ヲ立ル事共口惜

事也

一カサメノ事可盛カタ子流ニ餘多有哉雖然當流  
 ノ一ハ各別也是ニ龜足ナクメハ假初ニモ御前  
 へ不可參甲ニ盛ヘシ若ガザメノ甲ナクハ土器ニ  
 可盛也當世折敷ニ取双テ參スル不可然事也  
 一カキ蛎コ海鼠タ、ミノ支此冷汁當世アエ給様當流ニ  
 相違也是ヲモ口傳ヲハ不知メ推量成ニ依テ如  
 此ノ事ナル哉先ナマコヲ能ホトニ作りテ酒ニ  
 テソト色ヲトルヘシ同カキラモ酒ニテ色ヲト  
 リテ蛎ヲハ能タ、キテサテ山葵辛ニテ辛ニ

ニハ山葵可入シホ酒ヨキ若山葵ナクハ辛ニハ  
何ニテモ可入若蛎ナクナマコ斗ニテアラハコタ、ミ  
ト云也蛎ナキ時人ノ了簡ニ蛤ヲ夏非本儀

一當世ワロキ夏何ニハ針栗ヲ入針生姜ヲ入夏  
イカナル口傳ソヤホヤ汁ニハリクリヲ入事ハ  
ホヤノ毒ヲ生粟ニテ可消タメニハリクリニメ  
入也カラ鮭ノ水アエニ生姜ヲ針ニメ入ハ水ア  
エト名ヲ指タル間水毒ヲ可消タメナリケ様ニ  
万夏昔ヨリ飼鋪以下ノ事迄モソノ徳ヲホメタ  
ルニヨリテ定置所也鮎ノ子ナマスニ當世ハリ

生姜ヲ入事如何ナルトクソヤ若辛ニノ為歟然  
ハヲロシテ入ヨカシ乾鮭ノ水アエニハリ生姜  
ヲ入事ハヘキ生姜ノ心ニテアレハコソアレ如  
何但毒ヲトリタルハリ栗トハリ生姜トヲ参々  
ラシハ如何ト申不審有ヘシソコニ口傳有  
一カナカクノ折敷ニ直ニ参リ物入テ参ニスル  
不可有責テハ花紅葉ノ下ニテハ芝居ナレハ免  
ス処モ可有古無之事也御前ニテ舞々猿樂ノ道  
ノ者ニコソ左様ニ有テモ苦カラ子カリソメニ  
モ角ノ折敷ニ参物ヲ直ニお散シテ出シタラハ可

参モノ欵カナカケハ角折敷土器ナトヲ可陶<sup>ル</sup>基也當世引物ト云物ヲ腋ノ膳五ノ膳ト心得給コソ不思儀ナレ飯参リテ扱土器一ニ皮イリニテモ何ニテモ盛テ参ラスルヲハ一物ト可申也土器一ニ何ニテモ盛テ御回リニ斗組テ参スルヲハ引物ト申也若腋ノ膳五ノ膳ナト、テ参セハ御汁斗ニテ御回リモ數有ヘシ今ハ如此ノサカイムサクニテ其記ナシ

一カハイリノ夏雁ノ皮剪ナラハ必木ノコシメテ以下ノ物入ヘシ何ヲモ不入ヲハ<sup>素</sup>皮剪ト云也

皮イリト云夏雁<sup>ヒ</sup>鵠<sup>ヒ</sup>菱喰ナドニモ不限魚ニハ鮭ニアリ然間只皮剪ト斗申事不可然皮剪ナニト名ヲ指テ献立ニモ有ヘシ鮭ノ皮剪ノ時ハ少モ身ハ不入皮斗可成也鳥ノ皮イリモ根本ハ皮ハカリ也

一魚ノヒレ可参夏鯉ノヒレニハ杉サシノヒレヲ第一賞翫ニ申傳此ヒレニ名余多有事ナレモ尊者ノヒレ杉サシノヒレト名付タルヲ當流ノ秘事トセリ是忝モ神秘也可秘々々彼ヒレ盛物ノ上ニ置事大事可成天子或京鎌倉ノ將軍セメテ

ハ攝政關白ナト迄ハ同前ニ可盛也ヒレ一ナレ  
凡置様ニヨリテ過分ナラハ罰ヲ可蒙ト見エタ  
リ口傳何ニモ此ヒレヲハ午ヲ付テ聞召サハ悉  
參ヘシ不參ハ一向ニ押除テ不可參殊ニ盛様ナ  
トヲ賞翫メ盛テ參ラセハ其心得一廉有ヘシ何  
ニテモ每物ニ盛様ヲ賞翫シテ參スル時コソ過  
分ノ至トハ亭主ニモ御禮有コトナレトモ古ノ  
様ニ仕立ヲ能拵テ參ラスル人モナシ喰知人モ  
ナクメ此道徒ニ成行更ニ可成今ノ世ニハ參物  
ヲ多拵テ參ラスレハソレヲ過分トノミ心得候

然間弥道ハ表杲テ可行哉

一 羨物ヲ拵テ可出事可參次第ハビブツノ位ニヨ  
リテ可出也魚ナラハ鯉ヲ一番ニ可出其後鯛ナ  
ト可出海ノ物ナラハ一番ニ鯨可出也水鳥ナラ  
ハ白鳥菱喰雁ナトケ様ノ次第ニ參ラス可シ但  
鷹ノ鳥ノ事ハ双ヘキ物不可有之

一 コバリノ支小鮒ヲ可用也其外ハ何魚成共可用  
タレミソニテ煮タルヲハコ、リ迄ニテ有ヘシ  
スリミソニテ煮タルヲハシロニノコバリト申  
也メシノ時コバリヲ出メ晝ノ肴ノ時白煮ノコ

バリヲ又出シタリ正不可難事也其コ、バリヲコ  
ソ當流ノ面目トハ心得申拵テ参スル也五月ノ  
未六月ニスヘシ

- 一 海老ノ船盛ノ事料理ノ物ナルヘシ然間貴人一  
御前ナト斗ニテ残ハ只ノワリエビニテ可然哉
- 一 コノワタノ事可秘之塩カラ少損シタルヲハス  
、キテ参スル也但コノワタラス、ク事大事也  
大キナル物ニ酒カ水ニテモ入扱コノワタヲ箸  
ニテハサミ上テ振ス、クヘシ當世是ヲ推量ニ  
コノ腸桶ノ中へ水ヲ汲入ス、ク間コノワタ水

- ニ盛テ用ニ不立也結句腐タリト云猶廣キ物ニ  
水ヲ入テコノワタヲハサミ上テ振ス、クヘシ  
然間切タルコノワタス、ク事不叶セハキ物ニ  
水ヲ入ス、ガハ細々水ヲ入替テヨシ
- 一 鳥ノ引岳焼ト云事雉子ノ引岳ヲ焼時身ノ中ニ  
赤ニ少宛有様ニヤキ切之参スル也是引岳焼ト  
ハ見給ハデナマヤキナルナド思テハ如何昔如  
此申定又自然鳥ノヤキモノノ味スク覺事アリ  
酒ヲカケテ塩ヲ振テ焼タル鳥必スクナル也當  
流ニハ水ヲカケテ塩ヲ振可焼也

一諸魚ノ鱸ヲ立ル事ヲカノサシミノ時鱸△立事  
可成充此ヒレノ名ヲハシラカトモ申此外ノ魚  
ノ鱸立ル事當流ニ不可有殊ニ鱸ノヒレ立事不  
可有之當世本トメ此ヒレヲ立ル不可然鯉鮓以  
下ノヒレ一向ニ不可立

一差味可盛事鯉ノウチミノ事ハヒハカイシキノ  
上ニカイシキアリテ叔子付ニテモ只ノ抄身ニ  
テモ盛ベシニ枚重ニテハ不可有之一枚完盛上  
也但子付ノ時フクサ盛ニ盛テモ苦間敷也酢ハ  
ワサビス成ヘシ但蓼出来ノ時分ハ青酢吉イカ

ナル魚鳥ニテモ青醋ハ苦間敷ナリ鯛ノ差ミノ  
事カイシキハ同前二枚重ニ盛也カイシキラ  
三所斗ニ盛也酢ハ生姜酢成ヘシ王餘魚ノ差  
ミハフクサ盛ニメヌタ醋ヲ能拵テ参スル也乾  
ノ一ハ一枚ウツクシク盛ヘシカイシキ同前又  
フクサ盛ニメモ不苦前コトチ鳥ノミ有ヘシコ  
トチヲハ上テ鳥ノミヲハサケテ置也酢ハ蓼ス  
也此魚ハ四条家ノ秘克第一成ヘシ鯉ハ海物ノ  
上ヲスル由中ツレ共此乾ニ對メハ乾上ルヘシ鱸ノ  
差味ノ事前申落候間又申鱸ノ差味ニハ前ニ尾

アモト三切ニテモ五切ニテモ上テ置テ同コワ腸ヲ  
置ヘシ此コハワタヲシラ皮共云也是モ當流ノ  
秘事也鰯ノ差味ハフクサ盛飼ニキ同前酢ハヌ  
タズ成ヘシ若ハ實效子ノ酢モヨシガガタニハ  
亀足メ青醋ヲ漆テ可參也  
一鳥ヲ差味ニメ參スル事雉子山鳥ニテモ荒卷テ  
置タルヲ筭取出メ湯ヲカヘラカシテ彼鳥ヲ入  
テ湯ヒキテ取上サマメ薄ク引テフクサ盛ニメ  
飼シキ同前蓼酢ニテ參ラスヘシ御湯漬ノ御廻  
ナトニ可然物也

一ウシ潮煎ホニノ夏ウシホヲ先能コスヘシ浦ニテウ  
シホヲ汲テ鯛ヲ煮テ參ラセシヨリ始ル也然間  
ウシホニノ口傳ニハウシホヲ汲テ先セシテ  
サテ魚ヲ入酒シホ入テ參ラスル也イツモノ如  
カツホ入ヘシ今ノ代ニモ自然浦ニテ人御所望  
ノ一有ランニハ如此シテ參ラスヘシ今人々鯉  
ヲウシホ煮ニメナト被申事如何ナル事ニヤト  
不審ナル一也雖然塩海ノホトリニテ浪ノ音迄  
ク聞ナシタラン所ニテ鯉ヲ切ハ鯛ヲロシノ鯉  
ヲ可切又河浪迄キ所ニテ鯛ヲ切夏アラハ鯉ヲ



口シノ鯛ヲ可切ナト、コソ古人モ申置レタル  
ニ料理ニ至テ鯉ヲウシホニスヘキト如何  
一酢入ノ夏今ノ人々ノ心得ニハヒツ不入ヲハス  
イリト被申事如何ナルトソヤスイリト申ハ鯉  
ニテモ鯛ニテモ差三ノ如ニ作リテ水塩カツホ  
酒入テ能ホトニ煮テ参ラセサハニ酢ヲ指テ参  
スル也是ヲコソ酢入トハ申侍レ  
一海月之夏差三海月ノ時モ醋ハクルニ醋ニテ参  
ラスヘシアヘ海月ノ時モクルニ酢ニテアエラ  
可参假花鯉能入ヘシカラニハ生姜ヲ可用也

一生蛇テウスル様取上タル始ハエグキ味有也然  
間フツウニ切テ塩ヲおテ能モミテ扱水ニテス  
ス、テアエテモ煮テモ可参ナリ  
一鳥ノ串焼ノイ鳥ノ引岳ヲ串ニ差テアフリテ中ノ汁ヲ  
推出メ扱クルミヲ子ハグトスリ付テカハクホトニ又ア  
ブリテ直違ニ切テ可参也是ヲ串焼ト云也  
一菊ノ汁シタ、ムル様若キ菊ヲ摘テ能ス、ギ下地ヲ  
カヘラカシテ扱菊ノ葉ヲ入テシホサカシホ味ヒテ参  
スル時クルミヲスリテ上ニ置テ参スル也春ヨリ冬  
ニ至迄参スル也是ヨリ秋冬ニテハ菊花ヲ取湯ヲ懸苦

味ヲ取如右料理參スルナリ  
 一 蚌ヲ折ニ積ヘキ事蚌ノ蓋ノ方ヲ下ニナシテツム  
 一 下ニ返ニ人拵テ參スル様ニハ不可積生タル兒  
 一 ノ如ニ積ヘシ  
 一 鮎ヲ串ニ可差夏春ヨリ七月中旬迄ハ頭ヲ上ヘナシテ  
 一 サスヘシ其後ハ頭ヲ下ヘ成テ可差也上リ鮎ノ時ハ頭ヲ  
 一 下ヘシテ可差也  
 一 鯉鯛以下鱈ヲ可盛夏御肴ニハ舟太ノヒレヲ可用飯  
 一 ノ時ハ一ノヒレヲ可用杉差鱈ハ何ノ時モ用テ上ニ可  
 一 置但貴人ノ事也其外隱屈ニハ諸人ノヒレヲ可用楢

其外ハ波ノ事ノヒレヲ用テ上置ニスヘキ云々

一式三献ノ事口傳  
 一 引渡シノ事ノシアワヒヲ五重テケツル也口傳  
 一 ホヲ十二タツヘシ閏月ニハ十三可立ノシアワヒ  
 一 重ル様口傳  
 一 一歩身ノ事公卿ニテモ足歩ニテモ置時ハ歩身ト  
 一 ハサヒトテシホト差寄テ置タルヲ四条流ト申  
 一 也差除テ置タルハ他流也  
 一 魚鳥ヲ臺ニ可置何モ俎ニ陶テ出ス如成ヘシ  
 一 白鳥ノ臺ヲハサスヘシ世ノ常ノ臺ノ如曲タル

ハ不可然俎ニ置タル如ト申ハ臺ノ切口ノ方魚  
鳥ノ尾頭ノ方ニ可為但白鳥鴈菱喰以下ノ水鳥  
其外鷲ナトハ上下ノ切口左右ノソハニ可成何  
モ臭ハ右ノ方ヲ俎ニ付テ左方ヲ面ニ成メ可置  
但鯉ニテモ鯛ニテモ又鮓ニテモ數多臺ニ置時  
モ同如ニ双テ可置腹ト腹ヲ合テ置事不可然ソ  
レヲ如何ト申ニ左様ニ臺ニ置事用所有時ナラ  
テハ不可置ト也不断ハ不可置掣娶嫁娶ノ所へ  
樽ナトヲ遣ス時臭ノ腹ト腹ヲ合テ可置口傳雉  
子ハ春ハ女鳥サキニ秋冬ハ男鳥ヲサキニ置テ

腹ト腹ヲ可合也是ヲ四条流ノ口傳トメ其心ヲ  
秘スル也猶々鳥ト魚トハ同前田鳥水鳥ハ同前  
ニテ有ヘシ只鳥ト斗云ハ雉ノ事也  
一飯ノ献立ノ壹本膳ノ中ニハ必不紛定事ニハナ  
マス用処ニ近代無其義不可然ヤキモノ、事ハ  
本膳ニハ臭ノヤキモノニ膳ニハ鳥ノヤキモノ  
ノ有ヘシ是ヲ本膳ニ双テ鷄ノヤキモノヲ置事  
四条六条ノ日記ノ外成ヘシ不可有之子細也メ  
シノ大汁ニビブツラスル事不可難當流ニハ有  
之次ニサハサラニ香物以下ノ物居ヲ盛事ハ廿

余年此方ノ事也古ハ自然ヤキシホ山椒ナト少  
置タル歎勿論ヤキシホナト不入凡只サハ四ヲ  
ハ可置也ト云云冷汁ノ事義物ニ組添タラハ精  
進ノ冷汁ナレハ上リ也精進ノ汁ニ組付タラハ  
冷汁下ルヘシ但冷汁ヲアケテクメハバンノヲ  
モテ見悪間口傳

一包焼ノ事鮎ノ五六寸斗ナルヲ能鱗ヲフイテ腹  
ヲ明能洗テ叔結昆布串掬クルミケシ此四色ノ  
外ニ粟ヲ蒸メ可入五色入テ腹ヲヌイク、ミテ  
薄タレニカツホ入テ能ホトニ認テシホ酒シホ

入テ貴人ヘハ三ツ斗其外ヘハ一宛盛テ胡椒入  
テ可參此料理ノ事四糸家ニ秘スル也御門出ニ  
ハ尤目出度カルヘキ事也子細ハ天武天皇ト大  
友王子ト御代ヲ爭給フ時ノ事ニヤ天武天皇ヘ  
御歎ナスヘキトサマク書テ鮎ノ腹ニ入テ參ラ  
セラル、間御覽有テ即御謀共有ケレハ御歎ヲ  
以シエテ御心ノ如ク成リシ一也然間目出度御  
看成ヘシ其後左大臣殿此歌ヲヨメルト申ナリ  
イニシハイトモ賢キカタ、鮎包焼タル中ノ玉章  
又此御看出陣ナトニコソ同クハ參ラセ度ハ侍

暖ノ中ニ入色々ノ中ニモ取分結昆布ヲイカニ  
モ小クメ入タル是ヲ其時ノ玉ツサニ表スル間  
肝要可成其外ノ物ハ隨時可然物共ヲ可入粟ヲ  
入ハ鮓ノ子ヲ學タル也哥ニ包ヤキト曰タル所  
ニニモノニ拵參スル一口傳ニ有之可秘  
一組紙上ニ土器可置様ノ事鯉ヲ組ニ置テ出時内  
ヨリ庖丁人ヲ召出スヘキニハ筋刀ヲ組上ニ不  
置メ組紙ノ上ニ土器ヲ置テ出也此時ハ坐中ノ  
心得ニ内ヨリ人ヲ召出スト覺悟スヘシ又組ノ  
上ニ筋刀土器ヲ所置時ハ如此杉差ノヒレノ下

ニ庖丁刀ヲ敷テ筋ヲハ組紙ニ置テ同土器ヲ可  
置也此法ヲ不知者ハ組紙ノ上ニ筋刀上器ヲト  
フ一ニ取集テ置間組紙ノ上セハクメ見悪キ可  
成杉差ノヒレノ下ニ置庖丁ノ又向ニヨリテ庖  
丁人ノ心遣有ヘシ魚ノ尾方ヘ又ヲ向ルトモ有  
ヘシ又頭ノ方ヘ向テモ置也庖丁人ノ心遣ヲ以  
ケイコノ程顯也但組紙ノ上ニ刀ヲ置居此用心  
ハ有ヘシ然間當流ニハ組紙ノ上ニモ置様ハ又  
方ヲ組ノ上ヘ成テ置也繪圖アリ刀ノカイヘラ  
ノ一アリ同袖返シ袖ナカシノ一アリ

一 龜足ノ車前ニモ大概申ヨノ常ノ紙ニハクニテ  
モ又ハベニナニテモ引テ龜足ニ用夏ハ常ノ儀  
成ヘシ禁中ナトヘ可參御折ハ角モ多ク又少足  
モ高有ヘシ然門龜足ノ紙ハ薄也ウ成ヘシ但飼  
敷ニヨリテ薄ヤウヲ可用御着ニテモ御折ニテ  
モ此儀也口傳賞翫ノ御折ハ八角可成ト云云  
是ハ禁中ノ折成ヘシ古ハ四角ノ折ヲ專トメ侍  
ルカヤ今ハ六角ノ折ヲ上下嫌ハス用之夏如何  
ト老人被申シ也同高立<sup>カウタテ</sup>ノ事説アリ香立<sup>キウタテ</sup>在申又  
高立<sup>カウタテ</sup>在申兩説如何ト尋候ヘハ何モ不苦ト也ヒダ

ノ數十ニ有ヘシ又衣類ノヒタト高立ノヒダ又  
瓶子ノ蝶形ノヒタナトハカイサマ也其ヲ如何  
ニトアレハ參ラセ向ヲ本トメ賞翫ノ心ニ折ノ  
ノ内又ハ瓶子ノ内ヲ生メカイサマニモ不構セ  
リ然間衣類ノヒタ本可成可秘  
一 參ラセ物ノ上ニ置カウトウノ夏香頭モ申鷄頭  
在申也文字ニ書時兩説有口傳白鳥菱喰鴈ナト  
一 ノ皮入ノ時ハヘキ生姜ヲカウトウニ可置萬美  
物ノシメ<sup>シメ</sup>旬有<sup>旬</sup>箕ノ時分ハ抽ヲヘギテ可置是物  
ノ旬ヲ為可紛也當世吹口ト名ヲ付テ万ノ每物

長三万六千五百

三十一

ニ香頭ヲ入ル<sup>ル</sup>如何ナル仕立ノヤ非當流不可  
兼引

一膾ノ事山吹ナマスト云ハ半面魚膾ノ事也カレ  
イノ子ヲイリテアヘテ参ラスルヨリテ山吹ノ  
如ナルト申傳侍系膾ト申ハ鮓ノ膾ノ事也是ハ  
如何ニモ細ク作テアヘベシ大ニ作レハ口中ニ  
久ク有テ必ナマクサク覺間料理徒ニ可成其心  
得ヲ忘レジカタメニ系ナマストハ名付タリト  
被申シ也鯛ヲ膾ニ用時大根ヲ加ルヨリ外ノ支  
ヲハ人知玉ハス此膾モ鯛ノ子ヲイリテアヘベ

キ一本可成カラニハ生姜ヲ可用惣別料理ト申  
ハ鯉ト心得タラシカ尤可然也里魚ヨリ料理ハ  
始リタル也蒲鋒ナトニモ鯉ニテ拵タルコソ本  
説可成也可秘々ト云  
一當流片身下ニ諸人ヨリハ不切メ脊太ヲ先ワカ  
ツ<sup>ツ</sup>ハ陽ノ庖丁ナレハ前ヨリ切ト也

右此條々相傳之趣努々不可有外見者也

于時長享三年二月下旬 貞賢在判

多治見備後守

右四條流庵丁書以伊勢負春本校合了

貞實五限

古典秘史 賦詩之遊 贊之不 阿南 長 卷之三

一 卷之三 賦詩之遊 贊之不 阿南 長 卷之三

一 卷之三 賦詩之遊 贊之不 阿南 長 卷之三

一 卷之三 賦詩之遊 贊之不 阿南 長 卷之三

一 卷之三 賦詩之遊 贊之不 阿南 長 卷之三

一 卷之三 賦詩之遊 贊之不 阿南 長 卷之三

一 卷之三 賦詩之遊 贊之不 阿南 長 卷之三

群書類從卷第三百六十五



